



# 地域で

# 子どもたちを 育もう！



# Kids

## 「大人扱い」がうれしい

### 「川崎市北加瀬こども文化センター（神奈川県）」

川崎市幸区の住宅街の一角にある北加瀬こども文化センターは、財団法人かわさき市民活動センターが指定管理者として運営に当たる。館長の大崎いづみさんと職員の古屋美智子さんから話を伺い、地域の力を借りてどのようにして子どもを育てていくか、そのヒントを探った。（取材・文／井上 達也）

#### 運営協議会の協力を得て

取材したこの日、今年度4回目となる北加瀬こども文化センター運営協議会が開催されていた。「改善すべき点もあった」「久々に小中学生と接して本当に楽しかった」。この日の議題は先日開催された「こどもえんにち」についてで、運営に



対する反省点や感想を委員の方々が、熱心に話し合った。運営協議会は、地元町内会長、近接する幼稚園の園長、そしてこども文化センターを利用する団体がメンバーに加わる。大崎さんによれば「行事にも積極的に関わってくださり、また子どもを温かく見守ってくれる」とのこと。「かきかたクラブ」（書道）と「ケイキフラクラブ」（フラダンス）の2つのクラブも地域の人やボランティアの協力で開催される。

「親や先生以外の地域の大人と触れ合うことで、子どもたちは社会性等を養い、地域の方々が子どもたちに関心を持ってくださることが子どもたちの健やかな成長につながっていく実感がある」と大崎さんは語った。



運営協議会のメンバーの皆さんが活動をサポート



## 実行委員会(子ども運営会議)で成長する

川崎市は全国の自治体に先駆けて、国連の「子どもの権利条約」実現の問題に取り組んできた。放課後の子どもの居場所である、こども文化センターやわくわくプラザの活動において、市は子ども運営会議を実施し、子どもの意見を運営にも反映させてきた。北加瀬こども文化センターの職員もこれを踏まえ、ヒントやきっかけは与えるが、子どもが活動の主体であると考えている。

古屋さんは、「『こどもえんにち』の実行委員会を通して、子どもたちはお互いを支え合い、成長します」と語った。「こどもえんにち」の

実施は9月末であるが、準備は7月から始め、企画から運営に子どもたちが関わる。実行委員のある子は、図工が苦手でポスターが描けなかったが、休日にやってきて、

他の子どもたちの協力で色塗りをし完成させた。普段を知っている仲間たちは「やったね」と彼を誉めたという。頑張った子を認め合



中学生も生き生きと活動に参加している

うことで、子どもは存在意義を見出し成長する。

## 中学生もやって来る居場所

「学校でもやるけど、ここのドッジボールも楽しい」と小学校6年の男子が語ってくれた。北加瀬こども文化センターには、毎日中学生もやってくる。この日のドッジボールには、3名の中学生が加わり、小学生相手に汗を流した。中学生3名対小学生10名以上という試合もあり、小学生は大きな中学生相手に遠慮なく、思いっきりボールを投げつける。中学生たちは遅れて来た小学生のために、もらった賞品のお菓子を譲り、片付けも率先して行う。

「中学生たちは、こども文化センターに来ると遊ぶだけでなくさまざまな役割があります。大人として扱われることで存在を認められることが彼らに来る理由です」と、大崎さんと古屋さんは口々に語った。生き生きと動く子どもを見て、改めて子どもの存在を認めることの重要性を感じる取材となった。

